

(9) 酒の呑み方が普通人と違います。酒の味を楽しむとか、盃でちびりちびり味うとかはやらないで、湯呑みや、コップ酒で、大口を開けて、少し仰向きになり、ぐいっと投げこむ、咽喉を、ぐくんと開いて呑みこむ、こんな呑みぶりを「いっこむ」と称しています。口の中に通入った酒は、咽喉というパイプを、するりっと流れこんだといった表情です。

(10) 大酒呑みという方ではありませんでしたが、どちらかといえば好きな方で、少ない時で一升、今日は少し、いかい呑んじよろざいと云う時は、三升位でしたでしょう。この位、呑みますと歩き方が違います。少し酔った姿で、田舎道を、左右にゆらり、ゆらり歩かれますと、まるで、屏風が歩いているみたいに見えたものです。

結び

「半四郎話」は城下町はもとより、京都・築上・田川・筑前は遠賀郡・香月・小屋瀬まで拡がって話に花が咲き、尾にひれがつき、少しオーバーに語り伝えられている。

父六三郎・伯父忠二郎・弟助二・勝太の話までが加わり、半四郎話となりました。

それほど多田一家は、ほほえましい人の集まりでした。
(平成一年一月号〜四月号掲載)

合馬神楽のうち

湯立て神楽について

永津 正 則

私達が父親達から神楽の伝授を受けたのは、昭和九年(一九三四)のことであった。

☆復活された湯立て神楽

父達が盛んに神楽を舞っていた時代には、湯立て神楽の伝授を受けた時代には主役の人が亡くなっていたので、湯立て神楽は出来なくなって居た。そんな訳で私達は湯立て神楽の伝授は受けられなかった。

そこで、私達はなんとかして又湯立て神楽を復活させたいと願った。幸いなことに下石田に松山悦夫さんと云う人が居られた。この人は石田神楽の講社長を務めている方であった。私達は松山さんをお願いして湯立て神楽を伝授して戴くことが出来た。

もともと、石田神楽は築上郡の赤旗神楽系で、合馬神楽は京都郡の神田神楽系で系統を異にしていた。異系統間の伝授は困難を伴うものであったが、松山さんの決断によって成就することが出来た。

私達は練習に練習を重ねた末、湯立て神楽を復活させることが出来た。それを初めて実演奉納できたのは合馬の天役神社の秋祭であった。当日は北九州市役所から教育委員会文化課の柏木実さんと総務部長の上原勇策さん達が来られた。この時、湯立て神楽を立派に奉納するこ

とが出来た。私達の感激は一人のものがあつたことを強く思い出す。

他所から招かれて湯立て神楽を最初に興行したのは、八幡東区荒生田の天役神社であった。当日は態々、石田の松山悦夫さんも来られて技の上達を褒めて下さった。爾来、湯立て神楽奉納は十数社に及んでいる。

☆火鎮めを祈る湯立て神楽

湯立て神楽は鎮火を祈念する神楽であるから一週間前から精進潔斎して執り行われる。

先ず宮前の広場に笹竹四本を立て注連縄を張り巡らし神台を置きその中央に御神鏡を飾った幣を立て、その両側にも神を立てる。その前に御神酒・御洗米・川菜・瓢を供える。神台の左後方に高さ八米位の杉丸太を立て、三方に綱を張る。神台の右手前に高足の五徳(高さ一米二十釐位)に口径三尺三寸の大釜を据えこれに水を張る。その下に薪(割木)三十三把を積重ねて火を点ける。

神主出て来て釜場のお祓をし、続いて講員のお祓をする。(この時神下ろしの祝詞を奏する)湯鎮めの役が出て来て湯鎮めの祝詞を上げる。この頃既に湯は沸騰している。火鎮めの役はお初湯を神殿に供え、湯車を箸で持ち上げ神前に供える。次に火鎮め役が出て来て火鎮めの祝詞を唱え終わると五徳の下を通り火を鎮める。

御神殿の方より神主と鬼が出て来て五徳の下をくぐり神主を鬼が追う(五徳の脚の同じ所から入らぬ様に……)太鼓・笛・鉦の緩急の旋律が絶えず流れて来る。

釜の周り、火の上を神主と鬼が駆け巡る。
神主 杉丸太に登る。鬼が追い登る。
神主頂上近くまで来て綱に移る。

鬼は頂上まで来て神主を見失いきよきよする。
先端の幣を取り捨て、丸太に足を巻き付け両手を放して逆様に降りる。(曲芸的な事をして終る)

苦労した話 失敗した話

小倉北区の篠崎八幡宮で二度湯立て神楽を奉納したが最初の時の事である。

御承知の様に篠崎八幡は境内に一面玉砂利が敷き詰められている。その玉砂利を掻き除けずに釜場を作ったため、火鎮めを行ったところ、下の砂利が焼けて居て火渡しをした人達はいへん熱くてたまらなかったそうである。

長行の八旗八幡神社で行った時には、その頃合馬神楽ではまだ杉丸太を備えてなかったため、お宮の方で杉丸太を準備して戴く様に頼んで居たところ、世話をする人達が用意したのは立木を切って杉の皮を剥いだばかりの杉丸太であった。その上湯立てをやる頃になって運悪くぼつりぼつり小雨が降り出して来た。登る人はずいぶん苦労したということである。

徳吉の稲荷神社の場合、既に故人になられた吉兼の上田市太郎さんが古稀の祝いに個人で神楽を奉納して戴くことになり、湯立て神楽も舞って貰いたいと云うので総べての道具を揃えて行ったが、何と其の晩は物凄い強風

であった。とても火を焚くことができないので神楽の幕合いに、「今晩は最後に湯立て神楽を舞う予定でしたが、此のように強い風が吹いているので出来ません。どうぞ御諒承ください」と断りの挨拶をした。

ところで、予定した神楽を次々と舞い納めて湯立て神楽を舞う時刻になると、その風がびったりと止んでしまった。お陰で湯立て神楽も無事に舞い納めることが出来た。本当に不思議な事であった。

次に東谷呼野の大山祇神社に神楽を舞って貰いたいと招かれた時のことである。

その日は朝から烈しい雨が降った。湯立て神楽も演目の中に入っていたが、この雨ではとても出来そうにないので、諦めて他の神楽だけ舞うことにして行った。この時も舞いが終わる頃になると、雨は上がり、晴れ模様になって来た。そうすると、お宮の世話をする人たちが、「折角の事だから、湯立てもやって貰いたい。杉丸太を持って来てないなら、祇園山笠の担ぎ棒がある。あれでやってくれ」と云い出したので、私達も承諾した。

ところが御承知の様に祇園の担ぎ棒は両端の担ぐ処は細くしてあって、中程は膨らんで居てとても登りにくい作りになっている。しかしこれも見事に成し遂げることができた。

(平成八年十一月号掲載)



表紙の絵

画題 野に舞う(道原菜)

筆者 山口義明氏

住所 北九州市小倉南区大字道原二九五

電話 ○九三―四五―一―二二四

略歴

昭和四年北九州市小倉南区大字道原に生誕

昭和三年福岡第二師範学校卒業

昭和四年藤原功牛先生に師事南画を習得

昭和三四年大田歳先生に師事日展に出品

昭和三六年日展初入選以後日展五回入選

昭和四六年日春展(日展春季展)初入選

以後入選五回

。大潮美術展(全日本教職員美術展)

特選二回

。福岡県美術協会会員・会員賞受賞

。岩田屋賞・TNC賞受賞

。コンクール連展 埼玉県知事賞受賞

。 ” ” 東京都教育委員会賞受賞

。 ” ” 審査員

。日本芸術作家賞受賞

。アート・ワールド賞受賞

。ボザール展 余暇開発センター賞受賞

。 ” ” ウズベキスタン展招待出品

。外遊十四回二十ヶ国を巡り

現在各国の風物を製作中

。個展十二回

平成十年三月二十日発行

非売品

三谷むかし語り

合本第二巻

発行者 むかし語をする会

代表 内山 茂

北九州市小倉南区大字石原町三四四

電話 ○九三―四五―一―〇三三〇

研究同人 谷端 勲 西田 士導

山本 公一 松本 洋一

前田 守次 内山 茂

小柳 秀次(平成十年一月二十五日逝去)

印刷 若園印刷商会

北九州市小倉南区若園四丁目5-10

電話 ○九三―九六―一―三〇九一

FAX ○九三―九六―一―三〇九一